

編集後記

蔵原 晃一 松山赤十字病院胃腸センター

A型胃炎は成因から自己免疫性胃炎(autoimmune gastritis; AIG)とも呼ばれ、胃体部優位の萎縮を特徴とし、無酸症と高ガストリン血症を呈し、悪性貧血の原因疾患として、また、胃NET (neuroendocrine cell tumor)と胃癌の発生母地として知られている。本邦ではまれな疾患と考えられてきたが、近年、A型胃炎の頻度は、内視鏡検診受診者の0.49%、ABC検診D群の25%などと報告され、従来の報告よりもはるかに高頻度であることが判明しつつある。一方、その病態や実態は不明な点が多く、高ガストリン血症の定義や抗胃壁細胞抗体陽性を必須とするかなど、明確な診断基準は依然確立されていない。その内視鏡所見はいわゆる逆萎縮パターンが特徴的とされるが、AIGの病期、*H. pylori*感染の有無により多彩な像を呈するなど、「木村・竹本分類」に当てはまらない胃炎として、確定診断に至っていない症例が潜在している可能性がある。

本特集号では、「胃と腸」誌初のA型胃炎特集号として、昨今の*H. pylori*胃炎の減少とともにクローズアップされつつあるA型胃炎に関する最新の知見を提供し、診断基準の確立、拾い上げ診断の向上に寄与することを目標とした。企画は小澤・海崎・蔵原の3名が担当した。自施設でA型胃炎症例を集積し、精力的に学会・論文発表している先生方に、序説、主題とノートの執筆を依頼した。

序説では、春間によりAIGの疾患概念と診断に関する問題点が明解にまとめられた。疾患概念の歴史的変遷についての記載は圧巻で、AIGとA型胃炎の定義の相違についても端的に記載された。また、*H. pylori*感染とAIGの関連についても自説を交え論述され、AIG診断の問題点がポイントごとにまとめられた。まず本論文を熟読のうえ、主題へと読み進みたい。

主題論文として、主に自験例の検討から成る7論文が収載された。本胃炎の診断基準が確立されていないことを考慮し、各論文の冒頭で各検討における診断基準が明記された。

まず海崎論文では、A型胃炎の病理組織学的所見が検討された。確診例の手術標本9例と生検・内視鏡的切除標本28例、加えて確定診断以前に

生検された検体についても対象とし、A型胃炎症例の時系列での病理組織学的変化が示された。生検によるA型胃炎早期診断の手がかりとなる論文であり、病理学的な診断基準の確立につながることを期待したい。

鎌田論文では、A型胃炎47症例を対象とし臨床的特徴が検討された。8例(17%)に自己免疫性疾患合併を認めたことなど臨床的特徴と血清学的所見がその頻度とともにまとめられ、診断基準を考えるうえでも示唆に富む内容となっている。

中島論文では、AIGのX線造影所見を明らかにする目的で筆者が代表を務める「ピロリ菌感染を考慮した胃がん検診研究会」関連施設で集積されたAIG 22例の胃X線画像が検討された。AIGは初期には*H. pylori*感染胃炎に類似した粗糙型の胃体部胃小区像を呈するが、萎縮の進行に伴いサメ肌様からスリガラス様の胃小区像を呈し、体部ひだが消滅するとした。筆者・共著者らによる書籍「X線と内視鏡の比較で学ぶ*H. pylori*胃炎診断」を併せて読みたい。

丸山論文では、自験AIG 75症例の内視鏡所見が検討され、本胃炎に特徴的とされる、固着粘液、WGA (white globe appearance)、残存胃底腺粘膜などの所見の頻度が明らかにされた。AIGと非A型open型萎縮性胃炎との内視鏡的鑑別についての記載が特に示唆に富む。精読したい。

八木論文では、自験例に基づいてA型胃炎のNBI拡大内視鏡所見が検討された。*H. pylori*胃炎とは異なり、やや大型で円形～楕円形の開口部が密に規則的に配列している像が特徴と言及された。さらなる多数例での検討を期待したい。

佐藤論文では、A型胃炎を背景とした胃NETについて、筆者らによる国内多施設検討を踏まえた最新の知見がレビューされた。一般には予後良好とされてきた同NETだが、リンパ節転移や肝転移を来した症例に基づいて、危険因子についても言及がなされた。

八坂論文では、A型胃炎を背景とした胃癌症例の臨床病理学的特徴が検討された。自験A型胃炎95例のなかで20例(23病変)に胃癌合併を認めた

とし、その特徴を解析している。胃癌合併例と非合併例の両者間における背景因子の比較検討が特に興味深い。

次にノートでは、A型胃炎診断の入口となりうる3つのパターン、内視鏡検診(青木論文)、胃がんリスク層別化検診(ABC検診)のD群(寺尾論文)、*H. pylori*除菌療法における“泥沼除菌”症例(古田論文)について、それぞれ詳述された。検診と実臨床の双方に直結する内容であり、是非、熟読したい。

また、主題症例として「*H. pylori*除菌療法後に急速に進展した自己免疫性胃炎の1例」(角論文)と「偽ポリポーシス状を呈したA型胃炎の1例」(小澤論文)が掲載された。ともにA型胃炎を診断するう

えで示唆に富む症例であり、その臨床経過と内視鏡所見を確認しておきたい。

以上のように、本特集号では、A型胃炎に関する、それぞれ意欲的な原著論文が多く収載され、最新知見が網羅された充実した内容になったと思う。AIGとA型胃炎の関係は、自己免疫性肝炎と肝硬変の關係に類似しているように思われるが、*H. pylori*感染との関連性など不明な点が多く、その病因、病態や自然史の解明にはさらなる症例の蓄積が必要となろう。本特集号が、実臨床におけるA型胃炎の拾い上げ診断に寄与すること、また、明日からの研究の糧となることを期待する。